

はじめに

(P.4～) 二冊目のカイエ・ソバージュ (引用者:「熊から王へ」のこと) では、「国家」の誕生のことが話題になる。人類の脳のニューロン組織に決定的な飛躍が起こり、いまの現生人類 (ホモサピエンス・サピエンス) の心が生まれたのが、後期旧石器時代のことであったとすると、それから2万年以上もの間は、そのニューロン組織を使って、「神話的思考が発達していったことが考えられる。その頃私たち現生人類の心では、「二元性」に基づく思考が行われ、物事は「対称性」を実現すべく細心な調整をほどこされていた。▲そこにはまだ、「国家」はない。それが出現するのは、この「対称性」をくつがえすべくして人間の意識におこった変化をきっかけにしている。現生人類の脳のニューロン組織は、その時にはもう完成してしまっているから、このとき起こる変化は、生物的進化の要素はまったく含まない。脳の構造もまったく同じ、能力にも変化はない。しかし、その内部で、力の配置の様式が、決定的な変化を起こすのである。▲その時、世界に「対称性」をつくりだそうとしてきた心の働きが、急展開を起こして、それまでの「首長」の代わりには「王」が出現し、「共同体」の上に「国家」というものが生まれることになった。それと同時に、「人間」と「動物」との関係、「文化」と「自然」の関係にも、大きな変化が発生して、人間の世界は今あるような姿へと、急速な変貌を始めたのだった。

序章 ニューヨークからベーリング海峡へ

「文化」とはなにか

(P.10～) 神話が語られた社会では、人間が動物に対して一方的に優位な立場に立ったり、具体的な人間関係を越えた権力のようなものが、人々の上に有無を言わさぬ力をふるったり、ということは起こらないような仕組みが出来上がっていました。人間の社会の内部には、豊かなものとあまり豊かでないものとの間の階層差が生まれているところもありましたが、そういう社会でも人間と動物の間の対称的關係は、きちんと維持されていました。ところが、国家というものが出来ると、この対称的關係が崩れてしまうのです。▲神話を持つ世界では、人間は「文化」を持ち、動物たちは「自然」状態を生きていると考えられていました。「文化」のおかげで人間は、欲望を押さえ、節制した行動を行い、社会の合理的な運行を維持する規則を守ったりしながら、動物にはまねのできない抑制のとれた生き方を実現できます。こういう「文化」を大切なものと考えていた社会の人間は、当然のことながら、自然や周りの人間たちにたいして、きわめてエレガントな考えやふるまいをおこなっていました。近代の人々が「野蛮人」だとか「未開人」と呼んでさげすんだ人々は、実は彼らを支配した近代人などよりも遥かに上等で優雅な「人間」だったのです。

非対称な「文明」

(P.11～) <引用者: (P.10～) の文からの続き> 神話を語っていた人々は、動物たちのことを「野蛮」だなどとは考えませんでした。動物たちは「自然」状態を生きていますが、そのおかげで動物たちは人間が容易に触れることも手に入れることもできない、「自然の力」の秘密を握っているのです。この世界の真の権力を握っているのは、むしろ動物のほうなのです。人間はそこで神話や儀礼をとおして、つまりは「最古の哲学」(引用者: 神話のこと) の思考様式をとおして、動物との間に失われた絆を取り戻し、「自然の力」の秘密に触れようとしていました。対称性社会では、権力というものとはそもそも人間のものではない、と考えられていたわけです。▲ところが、そこに国家なるものが発生すると同時に、このような関係が崩れてしまうのです。国家を生きている人間は「文化」を持つことを誇ると同時に、ほんらいは動物のものであった「自然の力」の秘密まで、自分の手中に収めてしまおうとしました。「文化」はほんらい「自然」との対称的關係のもとで、初めて意味を持つものであったのに、それが今や対称性のバランスを失った「文明」に姿を変えてしまいました。そして、そのとき同時に「文明」と「野蛮」の違いが、意識されるようになったのです。▲相手が動物であれ、人間であれ、その相手のことを「野蛮」であると決めつけたり、それに比べて自分たちはなんて「文明的」なんだろうとうっとりしたりする。こういう考えは、世界を構成しているものの中に、容易に崩れたりしない非

対称的な関係がある、そしてその非対称関係を維持することは、人類の文明にとって「正義」である、という先入観がないと生まれてきません。▲こういう先入観は人間が国家を持たないかぎり発生しなかったように思われます。神話的思考はそういう先入観が発生しないための「哲学」として、大切な働きをしていました。では世界に対称関係をつくりだし、維持しようとしていた神話的社会の内部から、どうして国家のようなものが誕生することになったのでしょうか。これが今度の講義の主題です。神話的思考とそれを壊そうとするものの戦い。私たちがいま生きている世界にとっても、これは深く考えるに価する主題でしょう。

二十一世紀の「野蛮」

(P.12～) <引用者：(P.11～)の文からの続き>すると、つい先々週(2001年9月11日)のことですが、ニューヨークでの大事件(9・11事件)がおこったのです。事件の直後から、「これは文明と野蛮の戦いである」というような表現が大声で語られるようになりましたが、これにはびっくりしました。……▲どうやら現代世界は今、深刻な思考停止の状態に陥っているようです。それというのも、「国家」や「文明」の外部に立った視点から、現実の世界におこっていることの意味を照らしたような思考が、ますます困難になりつつあるからです。……このような思考の閉鎖状態から脱出するためにも、私たちはこの世界をつくりあげているもろもろの制度について、それを発生の観点から深くとらえなおしてみる必要があるのではないのでしょうか。▲二十一世紀は「文明と野蛮の問題」がクローズアップされる時代となるだろうとは、前から予測されていたことです。二十世紀には資本主義vs社会主義という虚構の対立で、「文明」そのものが内抱する本質的な問題が隠蔽されていたと言えるでしょう。ところが二十世紀の終わりに、社会主義と資本主義(あるいは自由主義)の対立の構図が崩壊しました。二一世紀の世界では、グローバルな規模で自由主義・資本主義が地球を一元化し、地球上の民族や宗教の対立は終息に向かうだろうと言って、「歴史の終焉」ということを主張する人々がいましたが、この予測が完全な間違いであったことは、今世界におこっていることを見れば、一目瞭然でしょう。▲今日の世界では、富を得た者と貧しい者との差が極端に大きくなっています。人類の中のごく少数の人々の下にだけ、富を得るチャンスや仕組みが集中してしまって、圧倒的多数の人々には、そうした機構やチャンスに接近する可能性さえないのです。**富の配分が、極端に「非対称的」になってしまっています。そうした世界はみずからテロを招き寄せてしまう**でしょう。……現代の世界では、富の配分の不公平という形をとった「非対称性」が、さまざまな「野蛮」を発生させてしまっています。▲二一世紀に突きつけられたこのような問題を、解決に導いていけるような政治的思考を、わたしたちはまだ持っていません。いま地球上のさまざまな地域で発生しているこのような状況の真の意味を、近代に作られた政治的思考は、十分に解説できないままに、手をこまねいているばかりです。そういう時には、「はるかなる視線」(レヴィ=ストロース)の立場に立って、私たちの生きている世界を照らし出すような思考をおこなってみることが必要なのではないのでしょうか。ことによるとそういう場合には、神話の研究が意外と活路を開いてくれるかも知れません。そのような期待もこめて、神話についての新しい理解をもたらすための旅へと、その一步を踏み出してみようではありませんか。

「野蛮」を内部に組み込んだ現在社会

(P.14～) <引用者：(P.12～)の文からの続き>まず「野蛮」とは何か、ということから考えることにしましょう。私たちはふだん、何気なくこのことばを使っていますが、よく考えてみるとこのことばが、正確には何を意味しているのか、まったく怪しいものです。▲たとえば最近ヨーロッパや日本で、狂牛病や口蹄疫こういえきが発生し、たくさんの牛や羊が殺されていく恐ろしい光景が、テレビで何度も放映されました。とりわけ狂牛病の原因は、飼料として与えられた肉骨粉にあるのではないかと取り沙汰され、その製造過程も映し出されていました。牛や豚の内臓が小さく砕かれて骨と混ぜ合わされ、コンテナに積み込まれたり、ブルドーザーで押し分けられたりしている光景を、みなさんもお覧になったと思います。神話的思考を生きていた人々にとって、もっとも恐ろしい「野蛮」とは、まさにこのような光景のことを言うのです。▲「人間」と「動物」との間になんとかして対照的な関係をつくりだそうとしていた人々(引用者：採集狩猟民)にとって、自分達が生きるために殺した動物の体を粗末に扱ったりすることはとても考えられないこ

とでした。……肉骨粉の飼料を牛たちに食べさせるのは、一種の「共食い」を彼らに強いていることになりませんが、それほど恐ろしい「野蛮」な行為はないと、この人々（引用者：採集狩猟民）は考えてきました。そういう「野蛮」が現れてくるのを食い止めるのが、彼らの「文化」の働きだったからです。▲ところが、私たちの世界は彼らが「野蛮」だとみなした行為を、自分達の生活を支えている一番大事な部分にセットしているのです。しかも狩猟民達が想像もしなかったような巨大な規模で、そのシステムを日夜運行し続けています。私たちの「文化的」な生活は、そういう「野蛮」の行為の基礎の上に成り立っています。そう考えてみますと、現代社会というものがじつに不思議ななりたちをしているのが、わかってきます。この社会は、「野蛮」を自分の内部に組み込んだ、一種のハイブリッド・システムとして、機能しているために、さまざまなタイプの「野蛮」を除去できないばかりではなく、ひとたび危機的な状況が起こると、その責任を外の世界の、自分達がよく理解できない相手に投げつけて、その相手のことを「野蛮」呼ばわりすることになります。▲その意味では、二〇〇一年九月一日のニューヨークでおこった出来事と、狂牛病や口蹄疫に罹患した動物たちを襲っている悲劇的な状況とは、深いところでひとつながりなのではないでしょうか。どちらも、「野蛮」を自分の内部に抱え込んでつくられている現代世界の病症を、これ以上ないほどの明瞭さであらわしています。このような状況からの脱出の糸口を探っていくためには、私たちの世界の内部にどのような道筋で「野蛮」がセットされるようになったのかが、深いレベルで理解されなければなりません。神話について考えることは、たんなる学問的な興味や趣味の問題を越えて、実に今日的な意味を持っていると、私は考えるのです。

宮沢賢治の「氷河鼠の毛皮」

(P.14～) <引用者：(P.12～)の文からの続き>ニューヨークの事件があった夜に、私がまっさきに思い浮かべたのが、宮沢賢治のことでした。人間の世界に、圧倒的な非対称の関係が築き上げられてしまい、それが対話や富の公正な配分を阻んでしまっているところには、しばしばテロが誘発されます。そんなやり方でなければ、おたがいの間に理解や対話を発生させる対称な関係が作りだせないと考えた人々は、この「野蛮」な方法を実行に移すしか、ほかに手段を見いだせなくなってしまうからです。▲宮沢賢治は人間の世界に、そのような状況を見いだしていたばかりではなく、もっと根源的には、人間と動物の間に、揺り動かすことさえ難しい絶対的な非対称の関係が作りあげられてしまっていると見ていました。宮沢賢治は人間と動物を徹底的に分離してしまう考え方と、人間の社会の中に不平等や不正義がおこなわれている現実の間には、深いつながりがあると考えていたのです。そこで『注文の多い料理店』をはじめとするさまざまな作品の中で、利口な山猫や狐たちが、人間と動物との間の非対称をひっくりかえしていく、痛快な物語を語ってみせたのでした。▲なかでも『氷河鼠ひょうがねずみの毛皮』という作品には、いま世界でおこっていることの本質に深く触れている内容が、みごとに語り出されています。もちろんそれは近代の文学の作法にしたがった作品には違いありませんが、その物語を突き動かしているのは、まぎれもなく私たちにはもうなじみの深いあの「神話的思考」にほかなりません。近代にはすでに死に絶えたと思われていたその思考方法が、これほどまでにすばらしい表現に到達した例は、ほかではめったに見られません。この作品は形式において神話であるのみならず、語られている思想内容において、神話の精神をもののみごとに体現しているのです。

「熊から王へ」では、この箇所「氷河鼠の毛皮」の全文（下記URLをクリックしてください）を掲載

http://www.aozora.gr.jp/cards/000081/files/1934_17932.html

哲学の東北の彼方へ

(P.25～) この作品が書かれた頃（一九二三年）、アメリカとロシア（その頃にはもうソ連ができていました）では、北方の諸民族について人類学が、たトへんな勢いで発達をとげていました。……同じ頃に宮沢賢治もまた、ベーリング海峡を挟む北方の世界に、神話的思考のアルカディア（理想郷）を見いだしてしました。北方はその時代、まさに思想と文学における創造の源泉だったのです。▲宮沢賢治の生きていた時代、その北方にはまだたくさんの狩猟民たち

か住んでいました。北海道とサハリンにはアイヌが、サハリンの北地方にはウィルタやニヴフ（ギリヤーク）がいました。対岸のオホーツク海に面したアムール川流域には、オロチやウリチなどの狩猟民がいましたし、さらに北にはコリヤーク、アジア側ベーリング海峡のあたりにはチュクチが住んでいて、そのままベーリング海峡を越えると、文化的な連続性を保ちながら、イヌイトやアメリカ大陸北西海岸のインディアン諸部族（トリンギット、ハイダ、クワキウトゥル、ツィムシアンなど）の豊かな世界が広がってきます。▲その世界にはまだ人間と動物の間の野生の関係、つまり対称的な関係の記憶が、色濃く保存されていました。夏の季節の間は、人間が生きるために狩猟をおこなって、動物を殺すのですが、冬の季節になると、こんどはその関係が逆転して、動物たちの王である精霊が、人間を食べてしまうという考えが、神話や儀礼をとおして、あざやかに表現されていました。そこでは、人間がいつでも圧倒的な力で動物たちを支配するのではなく、**人間もまたほかの動物を食べたり、ほかの動物によって食べられたりする補食の連鎖の中に巻き込まれた、なんら特別な存在ではない生命の一員**として、人間よりも大きな存在によって「食べられなければならない」という思想が、生きていました。

最大急行に乗り込んだ貧乏な青年

(P.28～) <引用者：(P.25～)の文からの続き>ところが、アイヌの世界を南限として、このような対称性の思想は語られなくなってきました。かわりに登場してくるのが、人間の生物圏における圧倒的な優位を少しも疑わない人々です。この人々は、自分だけは食物連鎖の環から超越した存在であると思い込み、動物たちを自由に家畜にしたり、動物園に囲い込んだり、スポーツとなった狩猟で動物たちを殺してもかまわないと思うようになります。少なくとも、そういうことに疑いを持たない人間となるのです。▲宮沢賢治はこういう近代人の象徴のような人たちを、まとめて「最大急行ベーリング行」に乗り込ませて、弾丸のようなスピードで、神話的思考の最後の王国であるベーリング海峡限界に投げ込んでいこうとするのです。彼らは防寒用の分厚いコートを何枚も重ね着し、動物が見たら震え上がってしまうようなピカピカに光る鉄砲をたずさえ、なんの不安も抱くことなく、列車の座席にからだを埋めて、眠りこけています。そういう人間たちの代表が、イーハトヴきっての大富豪タイチでしょう。この男はたかが友人との賭けのために、黒狐を九百匹も仕留めて、毛皮を手に入れようとしていました。資本を持っていて、その資本を投資や利殖によって増殖させていくことのできる、近代のお金持ちの代表ですね。▲その列車の中に、ただ一人、貧乏な青年が乗り込んでいます。いかにも寒そうな粗末な黄色いジーンズの上着を来ているだけのこの青年は、ほかの乗客たちとの会話に加わることを拒絶して、じっと暗い車窓を眺めています。この青年こそは、宮沢賢治の自画像なのでしょう。青年はどこか禁欲的でお金持ちたちが心地のよい快感的な生活を追求しているのに、青年はそれに背を向けようとしています。▲快感的な生活は人の心を鈍くしてしまいます。その結果、この世界の奥のほうで繰り広げられている、残忍な光景が見えなくなってしまいます。この地球上でごく一部の人間だけが豊かで、快感的な生活を送ることができるためには、それよりもはるかに多くの人々や動物たちが、耐え難い苦痛や死を味わわなければならないのだという現実を、まなこを開いて凝視し続けていなければならないと、この青年も宮沢賢治と同じように考えていたでしょうから、その心は車中の人々の会話などにはなく、はるか北方に広がる神話的思考の王国に、まっすぐ注がれていたはずで、▲北方の白銀の世界に生きる狩猟民たちは、タイチのようなお金持ちの目から見たら、お話にならないほどに貧しい暮らしをしています。家といったら半地下式の堅穴住居ですし、食べるものだって家具だっていたって粗末なものにすぎません。タイチのようなお金持ちは、そういう人たちを見るとかわいそうになって、厚い毛皮のコートを貸してあげようとか、援助物資をあげたらいいだろうとか思いつくものです。しかし、黄色いジーンズの若者はそういう親切な申し出にも耳を貸しません。それが貧しい暮らしだとは、ちっとも思っていないからです。それよりも問題なのは、豊かなものと貧しいものとの間や、人間と動物との間につくりあげられてしまっている、身動きもとれない非対称の現実に対してまったく無神経になっている、近代人の心のあり方です。

弱者のテロリズム

(P.30～) <引用者：(P.28～)の文からの続き>人間と動物との間になんとか対称的な関係を取り戻そうと考えていた、

神話的思考に生きる人々は、しかしこの近代世界の中では、どんどんと悲惨な生活に追い込まれていってしまいました。そのかわりに、圧倒的な非対称で出来上がった現実になんの疑いも持つことなく、それが天地の道理だと思いこんでいる人たちのほうは豊かで、これから楽しみのための狩猟に出かけようとしているのです。それは本質的な**優しさを欠いた世界**です。どうやったらそんな世界を覆したり、変えていったりすることができるのでしょうか。▲そこで、北方の神話的世界の「王者」である白熊が、この状況に根本的な変化をもたらそうとする、大胆な行動を実行に移したのです。テロリズムです。**大きな力で押さえつけられて、どんなにしても自分たちの主張や思いをその理不尽な相手に伝えることができないときに、弱者はしばしばテロの手段に出る**ものです。白熊は北極圏の動物たちを指導して、理不尽極まりない非対称状況を転覆すべく、列車を停止させて、そこへどやどやと乗り込んできました。無神経なまま、動物たちにとてつもない苦しみを与えている者を処刑しようというのです。▲おそらく白熊たちの主張は、こうでしょう。かつては人間と動物の間には、対称的な関係がなりたっていた。もちろん人間のほうが技術の力でまさっているから、どうしたって現実には対称性などは実現できなかったけれども、まだ優しい心を持っていなかった人間たちは、神話や儀礼を通じて、人間と動物との間に対称的な関係を取り戻そうという努力を重ねていた。ところが、最近になると、人間たちはそういう神話の思考などを馬鹿にしはじめて、神話から脱却するのが進歩だとか吐ぬかしたあげくに、動物に対する人間の支配を天地の道理のように考えるようになってしまった。われわれはかつて実現されていた、動物と人間との対話の復活を要求する。人間と動物の双方が寄り集まって、地球上に生きるすべての生命が発言の権利を持つ会議を持たなければならない、とわれわれは考える。しかし、ほとんどの人間たちは、動物たちが悲鳴のようなメッセージをいくら発しても、いっこうに耳を貸さなかった。そこでわれわれは、弱者に残された唯一の手段であるテロを実行に移すことにした。テロがよくないことぐらいは、われわれだってよく知っている。しかし、われわれをそこに追い込んでしまった人間たちのしていることは、もっと悪い。いまや人間たちは許し難い「野蛮」に陥っている。▲まるでこの作品は予言のようではありませんか。「最大急行ベーリング行」におこった出来事は、まったく最近のニューヨークに起こった事件を彷彿させるではありませんか。地球上でもっとも豊かな暮らしを享受している人々は、そのことですっかり無神経になって、ほかの大多数の人類に、理不尽な非対称の状況を押つけているのではないのでしょうか。テロの行為は「野蛮」です。しかし、それを誘発したのは、別の種類の「野蛮」なのです。

無法はやめろ

(P.32～) <引用者：(P.30～)の文からの続き>さて、宮沢賢治はこの問題にどのような解決をもたらそうとしていたのでしょうか？▲圧倒的な非対称でできあがった世界に対する動物たちの憤りや悲しみは、宮沢賢治のほかの作品でも、とても印象的に描かれています。彼はこのような現実には、神話的思考をもって挑もうとしました。そこから「野蛮」と戦う文学というものが生まれたのです。近代社会にまぎれこんだ「未開人」のように、彼にはお金もなければ、力もなかったけれども、彼には誰よりも美しく真実を語ることでできる「ことば」がありました。「ことば」には元手が要りません。しかも誰もがそれを受け取ることができるのです。人間はなんと貴重な宝物を与えられているのでしょうか。しかも、宮沢賢治は自分の書いたもので原稿料をもらったことが、ほとんどなかったといえます。それだからこそ、その「ことば」は予言力を持つことになったのでしょうかね。▲北極の動物たちによるテロに直面した宮沢賢治は、つぎのように考えました。その考えは、黄色いジーンズを着た青年の一言に、みごとに表現されています。青年は言います。「おい、熊ども。きさまらのしたことは尤もつとだ」。▲おまえたちが何に苦しみ、何に悲しみ、何に憤り、このような無謀で野蛮な行為を行ったのか、俺にはよくわかるよと言うのです。▲「けれどもなおれたちだって仕方ない」。「生きているにはきものも着なけあいけないんだ」。お前たちにはむくむくにすてきなその毛皮が生えているからいいようなものだけれど、人間には体毛というものが無いんだ。だから北方に生きる人間は、毛皮をまとわなけりゃあならないんだ。▲それは「おまえたちが魚をとるようなもんだぜ」。ほかの動物の命を奪って生きるというのが、地球上に生まれた生命に与えられた宿命なのだ。地球上の生命は、そういう様式でしか進化してこなかったからな。白熊は人間のしていることの非道をあげつらっているけれども、お前たちが初夏の川で、産卵のために上流めざして必死で遡ろうとしている鮭たち

を、その鋭い爪で引っかけて殺して食べているのをみたことが何度もあるぞ。鮭のくやしきや悲しきのことを、お前たちは一度だって思いやったことがあるのかい。動物はみんな悲しいんだ。だから、人間がほかの動物を殺しているのを、特別に考えるのはちがっている。▲でも、お前たちがいうように、たしかに最近の人間たちのやり方は、酷いすぎる。その心から「地球法」の感覚が失われてしまっている。「地球法」というのは、地球の生命圏に生きるあらゆる生物に同等の権利を認めて、その上で食物連鎖の環や生態系にひとつの秩序を生み出そうとする「法」の働きのことだ。かつては神話が、その「地球法」の表現者になっていた。その「法」に対する感覚を、いまの人間がなくしているという、お前たちの主張はまったく正しい。▲だから「あんまり無法なことはこれから気を付けるように云うから今度はゆるして呉れ」。▲「無法（引用者：非対称のこと）をやめる」。これが人間にできる唯一で最高のことではないでしょうか。狩猟民の世界でこのような地球的な意味をもった「法」が守られていたことの記録が、たくさん残されてします。狩猟民たちは、自分に必要なもの以上の動物を獲ったりすることを、固く禁じてしました。また自分たちが殺した動物のからだを、丁寧に尊敬をこめて扱おうとしていました。そうしないと、動物たちがふたたびこの世界に再生してこれなくなってしまう恐れがあるからです。それによって、生き物に負わされた宿命が消えたりするわけではないのですが、少なくとも思考の中では、この根源的な矛盾の解決が計られようとしていました。それが「法」のある世界、別の言い方をすれば、「野蛮」でなし世界のあり方なのです。▲宮沢賢治という人は、二一世紀の人間が直面することになる、ほとんど解決不能な問題のありかを正確に言い当て、それにひとつの明確な解答を与えようとしているように思えます。ここには、神話的思考の可能性というものが、緊迫した危機的な状況の中で、ふたたび息を吹き返そうとしているのが感じられます。私たちが神話的思考を捨てたことを、人類にとっての吉兆と見ることなど、とうていできません。それによって、まるでパンドラの箱を開けたように、「野蛮」の子鬼たちがいっせいに人間の世界に飛び出してきたからです。だから神話について考えることは、現代を考えることに直結しているのです。

第一章 失われた対称性を求めて

非対称の悪の解消

(P.36～) 私たちは「対称性の社会」ということばと「神話的思考」ということばを、だいたい同じ意味で使うことができます。自分たちが作りあげている世界から、できるだけ非対称の関係を少なくしていこうとしている対称性の社会では、現実の世界ではたがいに分離されてしまっているもの同士が、内密の通路でいまもつながりあっていることをしめすために、神話の思考を用います。神話は時空がひとつに結びあう場所のありさまを、具体性の論理を使って描くものですから、いまは非連続に分離されてしまっているものが、時空かひとつであるその場所では、連続的なつながりを取り戻している様子を、うまく表現することができるからです。

第二章 原初、神は熊であった

熊は半人間

(P.74～) このように、象徴表現は、違う意味の場の中に通路を開いて、そこを自由に流動していく知性の働きがないと、動き出しません。現生人類が生まれる以前には、人類の脳にはまだそのような流動的知性の活動を許す、ニューロソ組織ができていなかったのも、親族関係のことは親族関係のことを扱う脳の部分で、これは食べられる植物か毒のある植物かを区別して認識し、記憶しておく脳の部分とは、しっかりとしたつながりをもつことができていなかったのです。違う分野のことを扱うコンピューターが、大きな脳の部屋の中に分かれて置かれて作動し、おたがいの間には隔壁のようなものがあって、別の分野に情報が流れ込んで、そこから新しい意味を生み出すというようなことが、おこらないような仕組みになっていたわけです。

人間的な心

(P.75～) <引用者：(P.74～)の文からの続き>ところが、この隔壁が突き崩され、それまで別個の小部屋の中におさまっていたニューロンが外の領域とのつながりをつくりだし、そこを通過して異なる領域を横断していく流動的知性が動き始めるという、革命的な変化が人類の脳におこって、いまの現生人類が出現したのです。それまでネアンデルター

ル人がつかっていたことばは、たぶん比喩の表現がまったく欠如しているか、きわめて貧弱なものだったと思われますが、それにたいして、現生人類の駆使することになることばは、豊かな比喩によって、違う分野の結合ができるようになり、さらには流動的知性のジャンプ力を使って、新しい意味をになったことばを創造することさえ、できるようになりました。つまり現生人類とは、ことばと思考の「詩的な利用」という能力を携えて、氷河期の厳しい環境の中に生まれ出た、新しいタイプの生物種だったのです（スティーブソ・ミズン『心の先史時代』松浦・牧野訳、青土社、一九九八年）。……▲「人間的な心」が、このときはじめて生まれ出るのである。流動的知性の活動が心の中に動き始めるやいなや、人間の心の中には、**他者に対する共感にみちた理解という、私たちにあってなによりも貴重な「人間的な心」**が発生するのである。それは象徴能力や詩的なことばの用法と、まったく同時に生まれてきます。そうしてみますと、人間が熊に変容していく可能性を、いかなる意味においても否定する近代科学などは、あさはかな思い上がりによって、象徴を操る詩的生物としての自分たちの本性を、正しく認識する能力を失ってしまっていると、言えるのではないのでしょうか。人類学を学ぶことには、ひとつの美德のようなものがあります。それは、人間はことによると熊かも知れないなどと考えている、謙虚な人間たちの世界のとらえ方を、知ることができるからです。

第三章 「対称性の人類学」入門

流動的知性こそ人間の徴

(P.78～)人間がいま使っている言語というものは、詩の構造と同じ原理をもった知性の働きが可能になったおかげで、生まれたものです。前の講義でお話ししましたように、現生人類の脳に、機能やカテゴリーの違う領域をたがいに結んでいくことを可能にする、ニューロン組織の組み替えがおこったことによって、人類には決定的な進化がおこったようです。それまでのネアンデルタール人の脳では、**隠喩メタファーや換喩メトニミー**といった「比喩」の能力が発達していなかったと推定されています。それが**異質な領域の間を自由に動き回れる「流動的知性」**の発生によって、人類はものごとを「記号」ではなく「意味」として理解できるようになったのでした。▲これをきっかけにして、言語というものがいまあるようなかたちに組織化されるようになります。人間が知っているあらゆる言語は、**隠喩の軸（パラディグマ軸）と換喩の軸（シソタグマ軸）**の組み合わせとしてできていることがわかっています。それ以外の言語はないのです。ですから、よく言語は人間の徴である、と言われることがありますが、もっと正確に言えば、言語を可能にしている「比喩」の能力こそが人間の徴たるであり、それを可能にした流動的知性の働きこそ、もっとも根源的な人間の徴である、ということになるでしょう。▲このことばの「比喩」の能力は、日常言語ではあまり前面に出てこないようになっています。日常言語では、はっきりした有用な意味を語ることのほうが大切ですので、話を面白くするとき以外には、あまり「比喩」の機能は、表にはあらわれないようになっています。ところが、この「比喩」機能を前面に引き出して、むしろ**隠喩や換喩の働き**だけで、まとまりのある意味を生み出そうとする言語活動があります。それが詩なのです。

神話の力

(P.81～)神話がこのような詩とよく似た働きをすることは、昔からよく知られていました。神話の思考も、隠喩や換喩のような「比喩」の能力を、フルに活用しています。それによって、神話は詩の場合以上に雄大な哲学的意図をもって、この世界を「象徴の森」につくりかえようとするのです。……▲神話的思考はこのようにして、現生人類の脳におこった飛躍の瞬間の記憶を、いまに留めているわけです。それは人類におこった最大の革命の、生きたモニュメントです。ジャガイモやトウモロコシが新石器革命の食べられるモニュメントであり、三色旗や凱旋門がフランス革命の視覚的モニュメントであるように、神話はニューロンの新しい接合様式の完成をしめす、耳で聞くモニュメントです。しかし、そこでおこった革命的飛躍の質でいえば、重要さにおいて神話（と詩と音楽）の右に出るものは、ほかにはありません。

第五章 王にならなかった首長

首長の条件

(P.136～)首長と呼ばれる人々は、「王」ではありません。王には権力があります。王は軍隊を動かして、戦争をする

ことができます。また自分自身がすぐれた戦士として、戦場におもむくこともあります。しかし、首長と戦争の指導者が、同一人物であることは、ほとんどありません。王の持つ権力は、しばしば絶対的なもので、どんなに理性がそれに反対したり対抗したりしても、王はそれに耳を貸すことなく理不尽な命令でも実行しようとさえします。ところが、首長にはそういうことは絶対にできません。対称性社会の首長には、そのようなことのできる権力がまったくないからです。▲**同じ社会の指導者でありながら、首長と王とはまったく対照的なあり方をしめています。**そこでまず、首長の特徴や条件を少し詳しく調べてみることにしましょう。▲アメリカの文化人類学者ローウィが、一九四八年に書いた論文で、南北アメリカのインディアン社会の観察をもとにして、**首長 (titular) が備えている特徴を三つ**にまとめています。この論文はその後の研究の出発点になったものですので、それから見ていくことにします。①首長は「平和をもたらす者」である。首長は、集団の緊張を和らげる者であり、そのことは平和時の権力と戦時の権力が、たいがいの場合には分離されていることにしめされている。②首長は、自分の財物について物惜しみをしてはならない。「被統治者」によるたえまない要求を斥けることは首長にはできない。ケチであることは、自分を否定するに等しい。③弁舌にさわやかなものだけが、首長の地位を得ることができる。▲ここには「政治」ということの根源がしめされています。**国家や政府というものをもたない人々の社会** (それが私たちの言う**対称性の社会**にほかならないのですが) **の政治的リーダー**は、弁舌さわやかにして、物惜しみをせず、争いごとを停止して、社会に平和をもたらす存在として、相当な人格の高さを要求されたことが、ここからもわかります。

第六章 環太平洋の神話学へ I

「東北」という社会思想

(P.160～) では縄文社会についてはどうでしょう。私たちはややもすると、縄文社会は、平等社会だと考えがちです。なにしろそこにはクニというものがくられなかったのですし、西日本に成立したヤマト朝廷への服属を強制されて、一部の者たちはじっさいに奴隷のあつかいを受けていたこともあったからです。縄文社会は国家をもたなかった＝彼らの社会は階層化されない平等社会であった、という考えにたどりつくのは、自然な流れかも知れません。▲しかし、これからお話ししていきますように、**社会が階層化されているということは、国家が発生するための必要条件ではあっても、決して十分条件とはならないのです。**階層化の進んだ社会が、みすがらの意志によって、あるいは思想や倫理によって、自分の中から国家をつくりだすまいとして、国家発生現場で厳重なコントロールや管理をおこなっていたケースは、たしかに存在しています。このことは、以前から渡辺仁先生などによって唱えられていた考えですが、まだ十分に認知された考えとはなっていません。▲しかし、あのように発達した青森県の三内丸山の縄文遺跡を見て、そこには平等社会がくりひろげられていた、などと想像することは、かえって難しいことです。そこには豊かな自然の資源にめぐまれた環境で、北西海岸インディアンの社会とよく似た階層化された社会が発達していたはずだ、と考えたほうが、人間という生き物の性質によくかなっているように思います。日本の東北地方に展開した縄文社会は、**階層化されていたが、その首長は決して王となることなく、人々が必要に応じて連合をつくることはあっても、それがクニに変化することはなかった、**と私は見えています。▲これは一つの「東北」の思想なのだと思います。豊かな自然環境は、そこにごく自然なかたちで階層化社会をつくりだしていきませんが、クニ＝国家というものの誕生の寸前にまで達していながら、対称性社会の「社会思想」をなによりも重要と考えた人々は、**さまざまな方策を用いて、クニが生まれようとするその臨界点で絶妙なターンを切って、対称性社会への着地をおこなってみせるのです。**

第七章 環太平洋の神話学へ II

「国家を持たない社会の臨界形態」

(P.185～) 人間の社会の内部に持ち込まれた権力を体現する者、それが王と呼ばれる存在にほかなりません。王は、ほんらい「自然」のものであった力の源泉を、人間である自分のもとに取り込んで、そこに社会があるかぎり君臨し続ける者であることをめざすものです。対称性を守る社会には、国家はありません。つまり、そこに首長はいても王などはいません。ところが、同じその対称性社会が「冬の季節」になると、あと一歩で王の存在に手をかけているさまざまな

「人食い」(引用者：自然の奥に潜む力能のこと)の存在たちに、華やかな活動の場所を明け渡しているのです。▲この「人食い」たちが、世俗的な時間のリーダーである首長と合体したときに、首長はまぎれもない王となります。ところが、北西海岸インディアンの場合にも、日本列島の縄文社会の場合にも、また多くの「少数民族」の社会でも、首長と「人食い」の合体はおこりませんでした。王が生まれれば、クニ＝国家が発生します。これらの社会は、豊富な備蓄経済を実現し、階層性を発達させ、国家がいつ生まれてもおかしくないような条件を十分に備えていながら、自分の内部からはけってそれをつくりださなかつたわけです。「国家を持たない社会の臨界形態」が、まさにここにあると言えます。……▲首長と「人食い」たちを分離しておくこと。これこそが、**対称性社会の抱いた最大の知恵**であり、人間が国家を持った瞬間から、とりかえしのつかないかたちで失ってしまった知恵にほかなりません。

第8章「人食い」としての王——クニの発生

絶妙なバランス

(P.193～) **対称性社会では、このように人間は理性の表現である「文化」を生きる動物なのであり、権力は理性を超越するものとして、「自然」の領域にあるものでなければならなかつたのです。そこでは、王も国家も、発生できない仕組みになっています。**

「王」の出現

(P.193～) <引用者：上の(P.193～)の文からの続き>社会と宇宙の間にバランスをつくりだすこのような仕組みに、あるとき異変が生じたのでした。それはたぶん、**臨界に達していた階層制をそなえた新石器社会のどこかでおこつたはず**です。▲そのとき、「自然」のものであつた**権力＝権能が、ある特別な人間に属するものであると主張される**ようになります。それまで「人食い」のような**超越的な存在**は、「自然」の奥深くにしまいこまれ、冬季の特別な時間にだけ秘密結社の成員の身体をとおして人間の前に顕現できるものであつたのに、これからは特別な人間の身体として、いつも社会の中にいることになるわけです。**首長と「人食い」(引用者：自然の奥に潜む力能のこと)の合体**がおこる、といつてもいいでしょう。**王の発生**です。▲このとき、対称性社会(「冷たい社会」とも「歴史を持たない社会」とも「国家に抗する社会」ともいわれることがあります)を支えていた、倫理エチカの構造が崩壊をおこします。

スサノオ神話の新しい読み方

(P.196～) 王の権力が発生するプロセスはこのように、なかなか複雑な論理の道筋をとらなければ理解できません。ところが、その複雑なプロセスを、神話的思考はじつに明快な表現に言い尽くしてしまうこともできるのです。日本神話の中でも、もっとも印象的なエピソードである、スサノオノミコトによる八岐大蛇(ヤマタノオロチ)退治の神話があります。▲太陽女神(アフアラス、鏡で象徴される)の弟であるスサノオは、大変な乱暴者であつたために、死者の領域である根の国に追放される途中、出雲の肥の川上で、その土地の首長であるアシナヅチ、テナヅチ夫婦が、悲しんでいるのに出会います。理由を聞くと、土地に住む大蛇が毎年生け贄を要求し、今年自分たちの娘イナダヒメがこのいまわしい犠牲者に選ばれてしまった、というのです。スサノオは一計を案じて、大蛇にしこたま酒を飲ませて酔わせたところに斬りかかり、激しい戦いのすえにこれを倒します。倒された大蛇の体内からは、またとない剣(草薙の剣)があらわれ、剣と首長の娘を手に入れたスサノオは、出雲に住まいを定めて、王となるのです。▲この神話には、王権誕生をうながした論理が、簡潔に表現されています。土地の首長アシナヅチ夫婦は、八岐大蛇の存在を怖れています。**この大蛇は自然の奥に隠された力をあらわしているもので、毎年祭りに人間を食べにやってくる「人食い」**です。スサノオはとても乱暴者でしたから、戦士と同じようにこういう「人食い」の存在とは親和性があるので、この手の社会外の権力にたいしては無力な首長とは違って、面と向かって戦うこともできるのです。▲激しい戦いをとおして、スサノオは「人食い」であつた大蛇を倒すことができました。すると大蛇の持ち物であつた「人食い」の特性は、スサノオの所有に移ることになり、彼は新しいタイプの、**社会の中において自然権力を体現する者**になることができます。このとき首長からは娘が差し出され、結婚がおこなわれます。古代人の思考では、食べることとセックスすることは一つです。スサノオは土地の首長の娘を性的に食べることによって、二重の意味で「人食い」としての王の特質をあらわして

みせています。▲さてこのとき、スサノオが倒した大蛇のお腹から、すばらしくよく斬れる剣があらわれた、というところが重要です。**この剣こそ、社会の内部に持ち込まれた自然権力そのものを象徴するものだからです。**

野蛮の誕生

(P.199～)そして、そこに「野蛮」が生まれるのです。動物たちは少しも野蛮なところはあります。それに、その動物たちとの間に出来るだけ対照的な関係を維持しようとしていた、神話によって哲学する人々も、いささかも野蛮ではありませんでした。動物を殺すときにも、相手の尊厳を傷つけないように、細心の注意が払われていましたし、自分の必要を超えた数の動物を殺すことも、禁じられていたからです。▲また、彼らの社会生活にも野蛮なところはあります。ポール・ヴァレリーというフランスの哲学者が「アナーキズム（国家を否定する思想）」を定義して、「自分の理性が納得のできない命令や掟に服従することを拒否する態度」と書いていますが、対称性社会の人々こそ、まさにこの「アナーキズム」の実践者であると言えるでしょう。……▲首長の権威を支えているのは、ある種の理性です。ところが王の権力は、盛大な宗教的儀式によって演出されなければなりません。それは、王権というものが、理性とは別種の力に触れているからです。もともとは「自然」の所有するものであった権力を、社会の内部にいる王が体現するのが王権なのですから、**「対立するものの一致」を堂々と演出できる宗教的祭儀によるのでなければ、王の権威を正当化することはできません。**▲クニが下す命令や決定には、どこか非人間的なところがつきまっています。自分の理性ではどうしても納得のできない命令や決定でも、クニが下すものならば従わなければならないという、重苦しい感情を消すことも出来ません。対称性社会では、こうした理不尽はできるだけ発生しないような方策がとられていたものです。彼らは人間の生きる社会は「文化」によって運営されなければならないと確信するアナーキストであったために、「自然」のものは「自然」に返そうとしていました。▲ここから、現代の世界にもつながってくる深刻な混乱が発生することになります。それまで、対称性社会では「文化」と「自然」は異質な原理として、できるかぎり分離されていました。ところが「自然」のものである権力＝力能を社会の内部に持ち込んだ王の世界では、このような分離は不可能となります。王自身が「文化」と「自然」のハイブリッドなのですし、クニの権力も同じハイブリッドを原理として構成されるからです。このハイブリッドな構成体にあたえられた名前こそ、「文明」にはかたまりません。▲野蛮はここから発生します。王のような存在を許した瞬間から、人間は力の秘密を「自然」から奪い取った気になって、それまで大切に保って来た敬虔の心持を失い、動物も植物も人間にとって役に立つだけの対象であるように見えて来るでしょう。▲すると、「自然」は開発をしたり、研究をしたり、保護したりする対象になってきます。動物や植物の家畜化がここから可能になります。もはや熊でさえ、偉大なるカムイ（カミ）ではなく、威厳を失った動物学上の一対象として、小児化されてしまうのです。かつては動物の特質であるとされた、食欲や吝嗇りんしょくや嫉妬深さなどは、今や人間のものとなっています。「文化」がそうした動物的特質が、人間のうちに現れてくるのを抑えていたのに、ハイブリッド化したこの世界では、むしろ人間の独占物ようになってしまいます。▲人間は動物たちにたいして、対称性社会の人々が聞いたらふるえあかってしまうような野蛮なふるまいをするようになりましたが、それと併し、国家のおこなうあらゆるタイプの野蛮が、大手を振ってまかり通るようになったと言えるでしょう。▲今日グローバル化する世界を主導している巨大国家は、「文明」と敵対する「野蛮」との戦いを、世界中に呼びかけています。王とクニの発生の内的メカニズムを探求して来た私たちは、このような呼びかけの言葉が無意味であることを、はっきりと理解することができます。**野蛮を生んだのは、文明なのです。国家が野蛮を撲滅することは、不可能です。それは、野蛮の発生を土台にして、国家はつくられているからです。**

終章 「野生の思考」としての仏教

「文化」と「権力」

<引用者：「野生の思考」とは対称性の思想に根ざした思考のこと>

(P.205～) 首長には、王や近代の政治家のような権力はあります。むしろ、権力に抗して、「文化」を守ろうとするのが、首長なのです。超理性的な権力は、もともと「自然」の領域に属していると考えた社会では、社会の中

枢には権力はなく、そこを動かしているのは「文化」の原理でなければならなかったのです。権力は社会の外にしなければならない、そうでなければ宇宙の一員である人間は、まわりの世界との間に、対称性を実現できなくなってしまうからです。▲しかし、このような新石器的社会的臨界点が越えられ、王となる首長が出現し、クニが発生してくるようになると、「文化」は急速に権力に対する対抗力を失っていきます。強大な権力は、かつての首長たちと違って、所有への欲望に突き動かされています。「人食い」の原理によって「民」に変貌させられた人々は、自分のした労働の多くの部分を、この権力に与えるのですが、王や国家はそうして集めた富や財や労力を、治水工事のような公共事業に使ったり、権力を荘厳にするための贅沢に使ってしまいます。国家を持つ社会では、「文化」までが権力に捕獲され、食べられてしまうようになります。

仏・法・僧と対称性社会

(P.211～) 仏教は長い歴史の中で、とても複雑な発達をしてきましたが、いちばんの基本になるのは仏・法・僧の三つです。この三つは、小乗仏教でも大乘仏教でも密教でも変わらない基本として大切にされている考えですので、この三つの基本をとおして、「心の内面の共和制」としての仏教というものを、確かめてみることにしましょう。▲まず仏ブツダについて。ブツダは「王者」ではなく「勝者」だと言われます。王は「文化」を凌駕する権力を所有しています。王の権力は、王国に組み込まれている小さなクニや共同体を呑み込んでしまう、大きさと強さを持っています。そのときでも、村の首長たちは「文化」の原理によって、村や共同体を平和に保っていかうとしていますが、王の権力は「超文化」の命令する力をもって、それを呑み込もうとするのです。▲ブツダはこのような王の権力を否定してしまいます。そのかわりに、力のない知恵によって、人々を導こうとします。王は民に向かって戦争を呼びかけます。ところがブツダは平和と調和の重要性を語りかけます。王は裁判の決定を下して、人を死刑にすることもできます。しかし、ブツダはなにかの裁定を下すのではなく、そのような事態がおこったおおもとの因果をあきらかにすることによって、当事者すべての心を解放しようとしています。ブツダの行動は、このように王の反対を向いて、むしろ対称性社会の首長の理想のほうを向いているのです。▲法ダルマには、このことがもつとはっきりとあらわれています。国家が生まれる以前の、対称性社会では、「自然」は人間のおこなう「文化」の営みを無化してしまう力があると、考えられていたものです。人間は「文化」の原理によって、自分たちの生きる空間を「自然」の真っ只中につくりだしますが、それはたえず内と外からの「自然」の脅威にさらされていたと言えるでしょう。▲外からの脅威というのは、文字どおり風や雨や植物の繁茂や地震や火事などによって、ぜっかく人間が開いた「文化」の空間が風化し、壊されていく危うさのことをさしています。しかし、「文化」は内側からの脅威にもさらされています。それはたとえば、近親相姦への欲望や食欲を抑えきれなかったり、動物の発する性的魅力に誘惑されて、社会の掟の外へ出て行ってしまおうとする衝動のことをさしています。こうした脅威は、つねに「自然」の領域からもたらされます。▲つまり、はじまりのときから、「自然」はつねに「文化」を無化する力をあらわしていたのです。アメリカの北西海岸インディアンが創造した、さまざまな「人食い」がそれを象徴しています。「人食い」は深い森の奥、「自然」の領域の深みから立ちあらわれて、「文化」があたえてくれる人間の意味を、容赦なく食べ尽くし、無化していく力を体現しています。その「人食い」の概念を社会の内部に組み込んだ瞬間から、権力を持った首長すなわち王が出現したわけです。▲ブツダは「自然」のもつこの無化する力を、「空」としてあらためて概念化することをおこなっています。この「空」は、同時代のインドの哲学者たちを震え上がらせるほどの威力をひそめていた、と言われています。インド哲学は、ある＝存在する」という概念を土台にして、構成されていましたが、ブツダの唱える「空」はその土台さえも無化してしまおうとしていました。▲そうすると、権力そのものも無化されていくこととなります。「自然」の無化する力を人間の社会の中に取り込んで王の権力としたのに対して、ブツダは一見するととてつもない力をもっているように見える王や国家の力でさえ、蜃気楼のように消えてしまうもの、実体のないもの、怖れるにたりないものと認識させることによって、権力を無化してしまう教を説いたのです。▲これによって、人間の社会の内部に取り込まれて、なにか実体をもった力であるかのようにふるまっていた権力は、幻想をはぎとられて、ふたたび純粋な無化する力となって、「自然」の領域に返却されていくこととなります。そして、権力を

「自然」の領域に戻したあとの人間に残されるのは、へりくだりと他者への共感にもとづく正しい生き方ということになりますが、これこそはまさにインディアンの首長たちが毎朝の訓辞で語っていた「文化」の理想にほかなりません。「自然」と「文化」のハイブリッドとしての権力が、ここに解体されるのです。ブッダが「王者」ではなく「勝者」と言われるのは、きっとそのことをさしているのでしょう。▲そして、三つ目が僧サンの共同体です。権力を無化し、内部を理想的な共和制によって作りあげた僧の共同体が、国家に庇護されて、国家の中に存在するという奇妙な現象が、ここから発生することになります。国家の中に「国家に抗する社会」が組み込まれているという、まことにデコンストラクティブな状況を、ブッダのはじめた精神的伝統が作りだしてしまっただけです。こんな奇妙なことは、キリスト教でもイスラム教でもおこらなかったことです。対称性にもとづく社会を否定して生まれたのが国家だったのですが、仏教のサンガはその国家のなかに、国家を否定する共同体をしっかりとセットしようとしたのですから、これはほとんどブラック・ユーモアです。大国に滅ぼされた小国出身の元王子さまならでは、すてきなブラック・ユーモアではありませんか。▲こういう「仏・法・僧」が一つになって、仏教の骨格ができあがっています。三つの基本のどれもが、同じ原理によっているのはあきらかです。対称性社会を否定し、滅ぼした上に誕生した国家というものが、巨大な発達をとげつつあった時代に、仏教は権力を無化して、それを「自然」のふところに返し、それによって権力が発生させていた野蛮を消滅させようとしていました。戦うな、殺すな、という仏教の教えは、セソチメンタルとは少しも関係のない、巨大な文明的な課題への挑戦から出てきたものです。そのことを最近では、仏教自身が忘れてしまっているようです。

<この文書は、「**生駒の神話**」(下記 URL をクリック) に掲載されているものです。>

<http://ikomashinwa.cocolog-nifty.com/ikomanoshinwa/>